

# 林俊雄先生の思い出

村上信明

1 林俊雄先生の思い出

林俊雄先生とはじめてお会いしたのは、私が創価大学に入学した一九九四年のことであった。それ以来、在学中はもちろんのこと、卒業後も野尻湖クリルタイ（日本アルタイ学会）や内陸アジア史学会などの研究活動の場でしばしばお会いする機会があり、二〇〇八年に専任講師として創価大学に戻ってきたからは同じ東洋史の教員として様々な仕事をともにしてきた。そしていよいよ二〇一九年三月、林先生は定年を迎え、創価大学をご退職されることになった。最初にお会いしてから四半世紀、この間に教わったこと、お世話になったことは数限りなく、感謝の気持ちは言葉に尽くせないほどであるが、ここで林先生との思い出を振り返りながら、ささやかな謝意を述べたいと思う。

私の大学入学当時、林俊雄先生は文学部人文学科教授として考古学の授業を担当されていた。東洋史、と

りわけシルクロードの歴史を学びたいと思っていた私は、林先生の講義の履修が可能になったらすぐに登録をし、授業に参加した。しかし、これがなかなかの難行苦行であった。まず林先生の講義は限りに開講されることが多く、川崎市の自宅から二時間近くかけて通学していた私にとっては出席するだけでもひと苦勞であった（私が創価大学に就職してから知ったことだが、林先生はご自宅が横浜市内にあるものの、連続して二日間授業があるときにはしばしば大学内に宿泊し、宿泊後の授業は限りに行われていたのだった）。そうして何とか教室にたどり着いた私を待っていたのは、古代中央ユーラシアの「鞍と鐙」についての膨大な量の写真であった。林先生はスライド映写機を手慣れた手つきで操作しながら、次から次へと写真を示し、それぞれについてテンポ良く（当時の私からすればものすごいスピードで）解説をされていた。考古学や中央ユーラシア史の知識がないどころか、競馬中継くらいでしか馬を見たことがなかった私にとって、その内容はまったくついていけないもので、必死に授業を聞いていたつもりだが、結局最後までよく分からないままであった。いま振り返れば、「鞍と鐙」は当時の林先生が専門的に研究されていたテーマであり、学部の一・二年生にとってはあまりに高度な内容だったと言わざるを得えない（と私は思っている）。私はその内容を少しばかり理解できるようになったのは、大学院に進学してから何年もたつてからのことである。

私が学部四年次のときには、大学院への進学について貴重なご指導やアドバイスをいただいた。卒業論文で清朝の新疆（ウイグル）統治をテーマとした私に、関連する英文の論文を紹介してくれたり、当時東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所にいた新免康先生（現・中央大学教授）をご紹介してもらったなど、

ゼミの学生でないにも関わらず様々なご助力をいただいた。心から御礼を申し上げます。

私が筑波大学大学院に進学した後も、前述のように野尻湖クリルタイや内陸アジア史学会などの場でしばしばお会いし、時には日本酒を飲みながら深夜までお話しをうかがうこともあった。また大学院を修了後、私は日本学術振興会特別研究PDになると同時に、内陸アジア史学会の会誌の編集に携わることになったが、このとき編集長をされていたのが林先生であった。林先生は、投稿されてくるすべて論考を短時間で読破し、的確に判断を下されるので、事務方としては非常に仕事がやりやすく、ありがたかった。そしてこの間に、私の創価大学への就職も決まり、その後も一緒に仕事をさせていただくこととなったのであった。

野尻湖クリルタイでは、だいたい二年に一回のペースで、夜の懇親会の直前に林先生のご報告が行われる(すでに恒例行事といってもよい)。先生のご報告は、大量の写真を次から次へと紹介・解説していくスタイルで行われるが、あまりにも写真の数が多く、時には報告時間が二時間を超えることもあるため、聴衆のほうも長丁場を覚悟しなければならない。会場では「今夜も長い夜になりそうだ」といった冗談も交わされるが、同じ職場にいる私としては、大学での仕事をしながら、年間にいくつもの国際学会に参加し、世界各地の博物館や遺跡を訪問するという、そのエネルギーシユな活動ぶりに驚嘆するばかりであった。

今後は大学での業務がなくなるので、これまで以上に国内外を飛びまわられることになるのだと思います。益々のご活躍と、研究活動の源泉であるお身体の長きにわたるご健康を心よりお祈り申し上げます。また学会でお目に掛かった際には、これまでと変わりなくご指導・ご鞭撻をいただければ幸いです。